

ヴァチカンを揺るがす LGBT 問題

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

LGBT 問題に対する諸見解

法王フランチェスコは2020年10月21日、LGBT問題について私見を初めて語った。(本誌2020年12月号参照)。それを機に、ヴァチカン内では賛否両論が堰を切ったように噴出した。

最初に、ヴァチカンの教義聖省から統一見解が出された。それによると、「教会は、同性愛者の結合、結婚に際して、特段の備えを有してはいないし、これからもそれはできない」。この声明は、法王フランチェスコの賛同を得て、教義聖省長官で枢機卿のルイス・ラグリアが署名した。ヴァチカンは次のように報道した。

この同性間の結婚は、カソリックでは、まさに大きく、また長年の問題でもある。同性愛者の結婚を容認する動きは長い間続いている。教会が罪ある人を許し、祝福することは正しく肯定されている。しかし、同性愛者の結合は、創造主の思いには描かれていない。この度、教義聖省が示した見解は、討論されるうちに、その解決の糸口を見つけるか、将来的に妥協していく点を見つけないといけないだろう。……神はいかなる人も愛する。教会も同じことだ。……キリスト教共同体、司教や神父は、同性愛的傾向を持つ人々を尊敬の念と繊細な気持ちを持って接するように指示されている。……ただ単に合法的かどうかという宣言だけでは十分ではない。人に対して分け隔てはあってはならないということだ。

ここで、同性愛者への祝福を与えることに反対するマルチチェロ・セメラー枢機卿の意見を記そう。「教会というものは、その時その時の状況に応じて変容するものではない。一つの祝福で、それを正当化するものでもない。生命の伝承からみれば、男女の統合は神の摂理に基づく。……それゆえに、結婚の祝福ということがあるのだ。バランスの取れた行動とは、教会が同性愛者の統合の正当性を法令化できないとかいった、聖書に記されていないことを記憶する必要がある。」

次に、ジェームス・マルティン神父の考えを記そう。神父はアメリカ人で、イエズス会に属し、執筆活動も行っている。

教会は、いつも LGBT の人々に寄り添わねばならない。教会と LGBT の人を結ぶ橋の役割が必要だ。……神は人を創った。神は人を愛す。神は人が幸せであることを望む。……アメリカにはゲイが多いことを知っている。そしてその同性愛者が、教会より祝福を受けたがっていることも知っている。……ドイツの神父の中には、同性婚をしたカップルを中心に祝福を受けたいものがたくさんいるようだが、西洋社会ではそういうことが多いように聞いている。ただ自分の知っている範囲では、むしろ「稀である」と言ったほうがいいかもしれない。教会は LGBT の人に、尊厳を抱き、理解と感性を持って近づくように心掛けている。イエスが社会から疎外された人々に寄り添ったように、それを見習うべきだ。

最後に、現法王に信頼されているオーストリアのウィーンの枢機卿で、ドメニク派の神学者のクリストフ・シェンボーン氏の意見を聞こう。シェンボーン氏は、教義聖省の発表した LGBT に対する見解には落胆したという。

教会は、我々にとっては母なるものだ。それゆえに、教会との接点をなくすことは、母の愛をなくし、教会から追い出された気になるようだ。このことは我々には、何もわからない。このことは肯定的な心配を我々に下すものだ。……聖なる結婚というものは、今日世界的に少なくなっている。神の前で祝福された男女の結びつきは、偉大で、神性であるし、神の贈り物として子供達を持つこともできる。このように家族に対する「YES」が他の形態に対して「NO」であってはならない。二人の歩みは、男女の歩みであろうと、同性愛者の歩みであろうと、神の心を求めることは同等なのだ。司教であろうと神父であろうと、私は繰り返すが、あなた方は神が示した理想郷に到達していない。しかし、人徳をベースにして、自分の道に生きること、成功のためのパートナーがいなくても、汝の道を進むことが大切だ。すべての人は神によって祝福されるべきだ。

ワクチンを受けることは義務だ

コロナウイルスのパンデミックにより、世界の各宗教も祭儀式を変更したり、各種行事も中止して、ウイルスの感染拡大を抑えようとした。そして、ようやくワクチンが完成して、多くの国々でワクチンを接種し始めた。早々にワクチン接種を始めたイギリス、イスラエルなどでは、コロナウイルス終息の予感を聞くようになった。その他のヨーロッパの国々も、いち早く、ワクチンの接種に踏みきり、国内の移動はもちろんヨーロッパ内での移動も緩和されてきた。感染のひどかったアメリカも終息段階に入り、海外旅行も場所によっては許可が出た。それを受けて5月28日には、1年以上途絶えていたアメリカ人観光客がイタリアに戻ってきた。これまで、青息吐息だった旅行界も期待を大にしている。これに並行して、イタリアでもワクチンの接種が進んでいる。

ローマ法王は、ワクチンの接種を受けるのは義務であると主張している。ローマ法王は、自分ももちろんワクチンを受けると、2021年1月10日に宣言した。実は、ローマ法王の侍医ファブリツィオ・ソッコル氏が、同じ1月10日、コロナウイルスによって引き起こされた肺機能の停止で死亡したのである。そこで、法王はワクチンの重大性を訴えたのだ。イタリアで採用し、使用しているワクチンは、アストラゼネカ、モデルナ、ファイザー、ジョンソン&ジョンソンだ。一時期、アストラゼネカが、あまり効果がなく、余病を引き起こすという噂が立ち、多くの人が不安を持ち、そのワクチンの接種を断り始めた。そこで、「アストラ・ゼネカは大丈夫だから、安心して接種を受けてよい」ことが、ヨーロッパ保健機構から保証されて、またアストラゼネカが使われるようになった。